

先進自治体事例紹介③

#	登壇者所属、職氏名	講演名
3	島根県隠岐郡海士町（大江 和彦 町長）	ないものはない！最後尾から最先端へ離島からの挑戦

【発言要旨】

■海士町の財政危機とその背景

- ・平成13年度末には人口2,000人余りの町で100億円を超える借金を抱えるに至った。
- ・「人口減少」「超少子高齢化」「超財政難」の大きな課題が背景にあり、この状況を「日本の未来の先取り」と捉え、まちづくりに取り組むこととなった。

■自立への挑戦と行財政改革

- ・合併は行わず、単独自治を選択し、住民代表50人とともに「自立促進プラン」を策定した。地域再生のキーワードは「自立・挑戦・交流」であり、守りと攻めの両面作戦を展開。
- ・守りの戦略としては、過去に例のない大胆な行財政改革を実施。職員給与をカットし、これにより住民から「役場は本気だ」との信頼を得た。

■産業創出と水産業の高付加価値化

- ・「攻めの戦略」として、新たな産業創出と若者の雇用の場づくりに取り組んできた。特に加工産業が未発達であったため、島の資源をまるごとブランド化するという方針のもと、事業を展開した。
- ・港に道の駅のような施設を設置し、産業部門の職員の3分の1を港に配置。民間活力が弱い地域では、官が率先して事業を推進する必要があるとの考えから、前面に立って取り組んだ。
- ・第一号の取組は水産物振興であり、「サザエカレー」というレトルト商品を開発。
- ・第二弾では、岩牡蠣の養殖技術確立し、首都

圏のオイスターバーで人気を博した。築地市場では最高値で取引され、高付加価値化に成功した。

- ・第三弾では、キャスシステムを導入し、漁獲物を地元で加工・凍結し、直接販売する流通改革を実施。これにより、漁師の収入向上と後継者問題の解決に寄与した。

■教育の魅力化と人材育成

- ・地元の県立高校「隠岐島前高校」が廃校の危機に瀕していたことを受け、「未来を創る島留学」と銘打ち、全国から多彩な生徒を募集。一クラスまで減っていた生徒数は二クラスまで回復し、新入生の約5割が島外からの入学者となった。

■若者の挑戦と地域の活性化

- ・「還流起こしプロジェクト」では、高校の卒業生やその仲間たちを全国から募集し、移住や定住ではなく「滞在体験」を通じて、自ら島での働き方をデザインする仕組みを構築。Z世代の若者が島に飛び込み、事業所で課題に挑戦している。

■人口動向と地方創生の考え

- ・令和5年までの約20年間で約1,000人の移住者を受け入れ、定着率は約5割。現在の人口約2,250人のうち、20%がこの20年間で移住してきた若者で構成されている。
- ・国勢調査では、離島で初めて人口がプラスに転じる可能性が見えてきている。
- ・地方創生の基本は「地域の自立と自治の原点」に

あり、危機感の共有、資源の活用、多様性の受容、交流の促進が重要である。「若者・よそ者・バカ者」が連携しなければ地域は動かない。

- ・海士町は「ないものはない」というスローガンを掲げ、便利なものがなくても生きていける、必要なものは自分たちで作るという精神を大切にしている。
- ・小さな離島でもキラリと光れば、日本の大都市や大国を引っ張る力になれる。地方からのまちづくりが、地方創生2.0の本質であると考えている。

【主な質疑】

■「大人の島留学」が特に印象的。隠岐島前高校の魅力化がどのようにして実現されたのか。

- ・「高校を守りたい」「特徴ある学校を作りたい」という思いから、地域と学校の関わりを重視し、地域資源や課題に高校生が挑戦する仕組みを構築した。
- ・役場職員が高校の職員室に机を置き、日常的に関わることで少しずつ信頼を得ていった。
- ・外部から生徒が集まるようになると、メディアにも取り上げられ、学校教員や県教委の意識も徐々に変化していった。これにより廃校の危機を脱した。

■若者が海士町に惹かれて来ているが、その一番の魅力・引きつけている要因は何か。

- ・実際に来た若者たちが感じているのは、地域の人々との深い関わりである。
- ・町長室のすぐ前には「大人の島留学生」たちが集まり、自由に議論を交わしている。
- ・地域との密な関係性や、自由で開かれた雰囲気、若者にとって「ヒットしている」要因ではないか。